

鳥取県羽合町

長瀬高浜遺跡Ⅰ

天神川流域下水道事業に伴う砂丘遺跡の確認調査



第1図 砂丘下の喜石をもつ1号墳（北東から）



序にかえて

鳥取県中部の県民が多年にわたり要望し続けてきた天神川流域下水道事業が、漸く用地買収を終わり、昭和52年度から着工の運びとなったことは誠に御同慶にたえないところである。この事業の完成により、同流域一帯の環境整備が飛躍的に向上するのみでなく、懸案の東郷池の浄化が期待できる等、その効果は誠に計り知れないものがあるであろう。

さて、この事業の終末処理場予定地である東伯郡長瀬高浜一帯は、かねてから土器破片の濃密散布地として知られるところである。

本財団は、鳥取県の委託をうけ、この事業と高浜遺跡保護との調整をはかるため、昭和52年8月より、同地域一帯の試掘調査を実施した。以下はその結果の概要報告である。

この調査は誠に困難を極めた。この遺跡は例の少ない海岸砂丘下にうもれたものであって、その遺構面及び遺物包含層は黒褐色腐植のクロ砂層であり、層位の崩壊・不明確は免れないし、その砂の堆積は現地形からは殆んど推定不可能である。

一般に砂質は掘削に対して極めて不安定であって、その限度は概ね3米にとどまるのみでなく、気象の影響をうけること多大である。このため、膨大なしかも不確定な砂をまず除去せざるを得ない等、著しい辛苦を経験せざるを得なかった。

この困難な調査にあたり、多くの援助を与えられた鳥取県土木部下水道課・倉吉土木出張所・県教育委員会文化課・羽合町・同町教育委員会・倉吉総合職業訓練校・長瀬部落を主とする住民のかたがた及び関係業者に、心から敬意と謝意を表する次第である。

昭和53年3月

財団 法人 鳥取県教育文化財団

常務理事 木 村 耕 造

調査関係者

総括 木村耕造 教育文化財団常務理事
古町政春 同 事務局長
指導 山本清 県文化財保護審議会委員
佐々木謙 同
手嶋義之 同
豊島吉則 鳥取大学教授
県教育委員会文化課
調査者 田中精夫 教育文化財団
影山和雅 同
森田純一 県教育委員会文化課
田中秀明 同
国田一夫 町文化財保護委員
安達幸範 町教育委員会
山形頸応 法泉寺住職
協力 県土木部下水道課
倉吉土木出張所
羽合町
羽合町教育委員会
羽合町長瀬部落 他

例 言

- 1 この報告書は、昭和52年度鳥取県から委託を受け、財団法人鳥取県教育文化財団が実施した天神川流域下水道事業に伴う長瀬高浜遺跡（鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜他所在）の試掘による予備調査の報告である。
- 2 報告書の作成には討議をもとに、田中精夫・影山和雅・森田純一・久保廣二郎が分担執筆し、編集は田中精夫・森田純一・田中秀明が担った。
- 3 航空写真は、県立博物館定点写真（1973年度撮影）によった。
- 4 出土遺物は、教育文化財団が羽合町旧役場で保管し、整理中である。

目 次

I 序 章

1 調査の経過	1
(1) 調査に至るまでの経過	1
(2) 調査の方法	1
(3) 調査日誌彙報	2

II 遺 跡

1 遺跡について	3
(1) 遺跡の位置と歴史的環境	3
(2) 地質調査結果	5
(3) 砂丘遺跡とクロ砂	10
(4) グリッドによる試掘	11
(5) 重機による試掘	13
2 火葬墓について	17
3 古墳(1号墳)について	21
4 石棺群について	24
5 土器群について	27

III 遺 物

1 弥生土器	29
2 古墳時代の土器	32
3 中世の土器	33
4 その他の遺物	34
5 遺物のまとめ	34

IV ま と め

40

挿 図 目 次

第1図 砂丘下の葺石をもつ1号墳	口絵	第36図 火葬墓 (SF-18)	20
第2図 遺跡の位置図	3	第37図 火葬墓 (〃)	20
第3図 調査前の状況	4	第38図 占墳北側の葺石	21
第4図 ポーリング柱状図	5	第39図 古墳西側	21
第5図 遺跡地周辺航空写真	6	第40図 占墳発掘現場	21
第6図 長瀬高浜遺跡調査位置図	7	第41図 占墳西側の葺石	21
第7図 長瀬高浜遺跡調査地区の名称	9	第42図 墓丘周辺の実測図	22
第8図 14-Eグリッド	11	第43図 SX-01 箱式石棺	24
第9図 14-Eグリッド	11	第44図 出土位置図	24
第10図 13-Dグリッド	11	第45図 SX-01	24
第11図 13-Dグリッド	11	第46図 SX-02	24
第12図 13-Dグリッド	11	第47図 SX-02 箱式石棺平面図	24
第13図 発掘風景	12	第48図 出土位置図	24
第14図 グリッド断面にあらわれた砂鉄層	12	第49図 SX-02	24
第15図 地下水面に毛る	12	第50図 SX-03、SX-04	25
第16図 14-Gグリッド	13	第51図 SX-03、SX-04 出土位置図	25
第17図 14-Gグリッド	13	第52図 SX-03	25
第18図 12-Hグリッド	13	第53図 SX-04	25
第19図 12-Hグリッド	13	第54図 SX-05	26
第20図 16-Fグリッド	14	第55図 SX-05	26
第21図 16-Fグリッド	14	第56図 SX-05	26
第22図 15-Iグリッド	14	第57図 SX-05	26
第23図 15-Iグリッド	14	第58図 SX-06	26
第24図 15-Kグリッド	14	第59図 SX-06	26
第25図 15-Kグリッド	14	第60図 19-E	27
第26図 遺構確認状況図	15	第61図 19-E	27
第27図 19-D火葬墓群	17	第62図 19-D	27
第28図 火葬墓 (SF-17)	17	第63図 20-E	28
第29図 火葬墓実測図(〃)	17	第64図 20-E	28
第30図 火葬墓実測図(SF-19)	18	第65図 20-E	28
第31図 火葬墓墓壇(〃)	18	第66図 旁生土器拓影	30
第32図 火葬墓写真(〃)	18	第67図 スタンプ施文拓影	30
第33図 火葬墓実測図(SF-2)	19	第68図 遺物実測図(1)	31
第34図 火葬墓(〃)	19	第69図 遺物実測図(2)	32
第35図 火葬墓 (SF-18)	20		

図 版 目 次

1 旁生土器・土師器	35	4 石製品・土製品・古錢・土鍼	38
2 土師器・甕・壺	36	5 北条砂丘関連遺跡の遺物	39
3 土師器・須恵器・土鏡	37		

I 調査の経過

(1) 調査に至るまでの経過

長瀬遺跡発見の動機は、昭和49年（1974年）5月7日のことである。国道9号線北条バイパス建設計画に伴い県教育委員会文化課が現地踏査を行ったところ、東伯郡羽合町長瀬の北条砂丘地東端部の路線予定地周辺一帯で弥生・土師器が濃密に散布しており長瀬遺跡と命名された。そして、県教育委員会発行の「改訂鳥取県遺跡地図（第2分冊・1974年）」に記載され、今回、地元民の呼称により「長瀬高浜遺跡」とした。

その踏査時、バイパス予定路線の南に接した砂丘地に天神川流域下水道処理場建設計画のあることがわかり、その建設予定地にも遺物散布地は広がっていることも明らかとなつた。

それ以来、県教育委員会と県土木部等の関係者は、埋蔵文化財包蔵地の保護と1市5町の広域下水道事業推進について3年余にわたり、再三の協議を続け、昭和52年8月ようやく協議が成立したのである。

その結果は、この砂丘遺跡の性格の追究、及び範囲をはざし工事との調整を図るために、試掘による遺跡の確認調査を実施することとなった。

昭和52年8月、調査委託者鳥取県と受託者財団法人鳥取県教育文化財団の間で委託契約書が締結され、調査が実施されるに至った。

委託業務の名称

天神川流域下水道事業天神川処理場築造工事に伴う埋蔵文化財の試掘調査

履行期間

始期 昭和52年8月24日

期限 昭和53年3月31日（当初計画を変更）

業務委託料

11,830,000円

(2) 調査の方法

工事予定地100,000m²の砂丘地を次の方法により確認調査を実施した。

ア 工事予定地全域の遺物の表面散布状況を把握する。

その結果、西方・北方の底部に遺物の散布が多く、なかでも土師器、弥生土器が多く、須恵器は数片であった。

イ 遺物散布地を手がかりとして、グリッドにより砂丘地に試掘を行い、遺物包含層、遺構面の確認に努める。

(ア) 試掘Ⅰ(手掘り)

遺物の濃密に散布する地域を主に $5m \times 5m$ 、 $5m \times 10m$ 、 $10m \times 10m$ のグリッド 24か所の試掘を行った結果、5か所で遺物を多量に含むクロ砂層を検出するに至り、20-E の拡大地区では円墳 1 基、火葬墓 25 基、石棺 6 基が密集していた。

(イ) 試掘Ⅱ(重機)

$10m \times 10m$ のグリッドをユンボにより砂丘表面下最深約 6 mまで掘り下げ、手掘り不可能な砂丘下の遺物包含層(クロ砂層)の確認 8 所を行った。その 8 所のうち、5 所で遺物包含層を検出した。

(ウ) 砂丘砂の土砂取除きによるクロ砂の確認

イのアの調査結果、南部一帯約 50,000m²の砂を県土木部下水道課が地区外へ搬出したけれども、クロ砂層は確認できなかった。

(3) 調査日誌彙報

昭和 49 年 5 月 7 日：長瀬遺跡(今回「長瀬高浜」とする)が踏査により発見される。
昭和 53 年 7 月 25 日：試掘開始に伴う事前打合せ会。現地にて区画設定のための杭打を行う。8 月 29 日：調査区域内の試掘にとりかかる。20-D グリッドでクロ砂を検出する。
9 月 5 日：19-D グリッドで箱式石棺検出(地表下約 2m 30cm)。9 月 19 日：13-D グリッドでクロ砂検出。この層で摩滅した土器片採集。9 月 24 日：14-E グリッドでクロ砂検出。同様に遺物を包含する。10 月 7 日：23 箇所にわたる遺構確認のための試掘終了す。
10 月 8 日：クロ砂、遺構を検出した 20-D グリッド周辺を拡張。10 月 13 日：20-E グリッド内のクロ砂中で完形の土師器壺検出。10 月 17 日：20-D の浜井戸中でスタンプ施文土器検出。19-E の表砂中で土鈴発見。10 月 29 日：20-E グリッド内で石棺検出。V 字枕周辺に骨片、歯片群検出。11 月 5 日：19-D で火葬墓検出。焼石、骨片、木炭等多数放散。さらに銅鏡(開元通宝)発見。11 月 9 日：19-E グリッドで石棺検出。石棺の上層のクロ砂中で完形の広口壺検出。11 月 10 日：19-D' グリッド西側で列石群検出。後に古墳の葺石と判明。11 月 21 日：火葬墓、葺石、20-E 土器群の実測開始。
11 月 27 日：遺跡調査と併行して地層調査のための掘削開始。12 月 1 日：古墳の中央部で検土杖により埋葬主体部を確認する。
昭和 53 年 2 月 7 日：古墳周辺区の拡大を始める。2 月 13 日：重機(主としてユンボ)を導入して 8 ケ所の試掘を行う。3 月 17 日：県文化財保護審議会委員、遺跡視察のため来訪。現地、役場にて調査説明会を行う。3 月 31 日：地層調査のための掘削終了。長瀬高浜遺跡確認調査一応終了す。

II 遺 跡

1 遺 跡 に つ い て

(1) 遺跡の位置と歴史的環境

長瀬高浜遺跡は、天神川が日本海へ注ぐ北条砂丘の東端部に当る、東伯郡羽合町長瀬字高浜他に所在し、長瀬集落の北西、海岸線からは約1km内陸（南）に位置する。

この北条砂丘は、元文年間（1737～41）の天神川改修工事が行われる以前、長瀬浜と北条浜は一連のものであったが、改修工事により現在のように切断された（羽合町史）という。



第2図 遺跡の位置図 1/50,000

この遺跡附近の標高は、高所で18.8m（前給水塔附近）、低所で5mの起伏のある砂丘地である。不毛の砂丘地といわれたこの附近も、昭和42年完成の畑地灌漑事業により浜井戸の使用からスプリンクラーへと近代化が進み、ブドウ、野菜畑等の農地として利用がはかられるにいたった。

当初の長瀬高浜遺跡は、遺物散布地で、天神川寄りの標高5~8m附近の西方に多く砂丘地表面に弥生、土師器が露出していた。

羽合町史によれば、天神川改修後、河口川底で縄文中・晩期土器が採集されたという。また、1975年長瀬高浜遺跡の西方約500mの天神川底で投網中に壺棺が採集され、1976年羽合町字和助北の長瀬第2遺跡で中学生により台付壺（弥生後期図版5）が発見された。

また、対岸の江北1号墳（消滅）は横穴式石室、その西隣りの北野神社では土馬（図版5）が出土している。

これらはいずれも北条砂丘東部に位置する砂丘遺跡の一端であり、縄文・弥生・古墳・奈良時代以降の墓地に関連した遺跡が多いことも注目される。

更に、視野を東郷池周辺へと拡大するならば、約870基の古墳を主とする遺跡が踏査により確認されており、遺跡の質・量ともに特筆される地域であることは、周知のことである。

北の馬山4号墳（現存長88m）、東の宮内・狐塚（現存長90m）、南の北山1号墳（110m）の大型前方後円墳の存在は、この地域の原始古代の社会が特異な存在であり、強力であったかを端的に象徴している。

東郷池周辺の海・川・池・砂丘・丘陵等、大自然の有機的な関連の中でこの砂丘地を古代人がいかなる生活の場としていたのか、今後の長瀬高浜遺跡の追究課題でもある。



第3図 調査前の状況（砂丘の農地利用）

1974撮 野田久男

(2) 地質調査結果

国土本部の依頼により、昭和51年度、天神処理場地質調査を株式会社荒谷建設コンサルタントが実施したものである。

天神処理場建設に伴なう基本設計、水源資料を得る目的で、(1)試錐調査、(2)標準貫入試験、(3)室内土質試験を工事予定地内10所実施した。

その結果、調査地附近の地質は、第4紀堆積物が広く分布し第4紀層を基岩として、その上位を第4紀堆積物が厚く覆っている。この調査地においても今回の調査結果では基岩を確認することはできなかった。

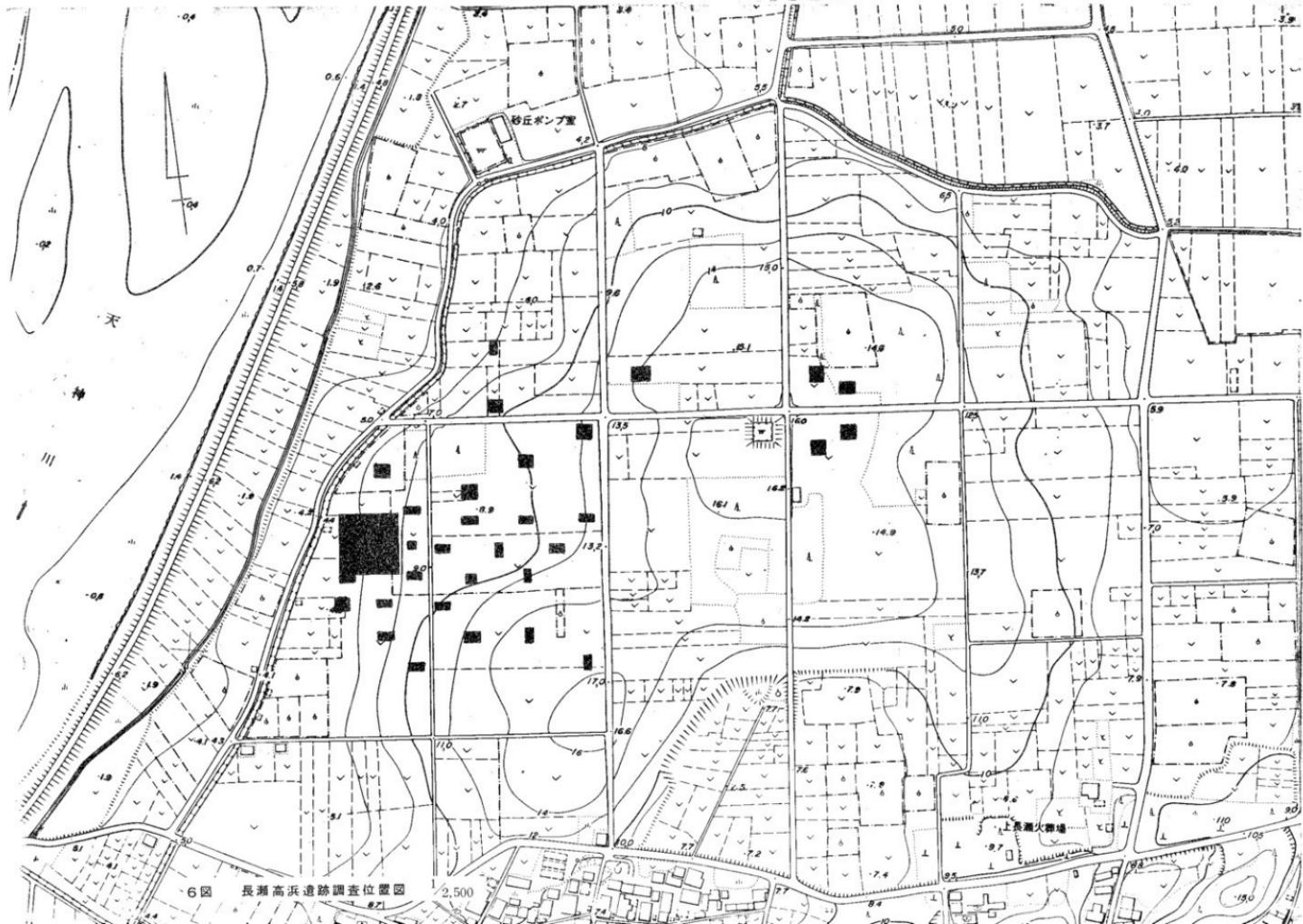
なお、ボーリング結果によれば、右表(13-E地区)の標高6.202m~7.50mで暗灰褐色のクロ砂が検出されている。この層位が直接埋蔵文化財の調査対象としている遺構層、遺物包含層と考えられる。

標高 (m)	標高 (m)	深度 (m)	層厚 (m)	色調	土質名	記 事
-	12.802	0	-	-	-	-
1-	-	-	-	-	-	-
2-	-	-	-	-	-	-
3-	-	-	-	-	-	砂は細砂で粒度も均一上層で京極等混入。
4-	-	-	-	-	-	-
5-	-	-	-	-	-	-
6-	6.202	6.60	6.60	褐	砂	-
7-	5.302	7.50	0.90	暗灰色	シルト質砂	全体的にシルト分を若干含み砂は細かく有機質含む。
8-	-	-	-	-	-	-
9-	-	-	-	-	-	-
10-	-	-	-	-	-	-
11-	-	-	-	-	-	砂は細砂で粒度も均一。
12-	-	-	-	-	-	-
13-	4.598	13.40	5.90	褐	砂	-
14-	-	-	-	-	-	-
15-	2.598	15.40	2.00	茶褐	砂	砂は細砂で粒度も均一。
16-	-	-	-	-	-	-
17-	-	-	-	-	-	砂は細砂で粒度も均一。
18-	-	-	-	-	-	-
19-	6.496	19.30	3.90	褐	砂	-
20-	-	-	-	-	-	-
21-	-	-	-	-	-	砂は細砂で粒度も均一。
22-	-	-	-	-	-	若干の小貝片混入。
23-	10.898	23.30	3.90	灰褐	砂	-
24-	-	-	-	-	-	-
25-	-	-	-	-	-	砂は細砂を主体とし若干の中砂を混入。
26-	-	-	-	-	-	-
27-	14.798	27.00	4.40	淡茶褐	砂	-
28-	-	-	-	-	-	-
29-	-	-	-	-	-	砂は細砂で粒度も均一。
30-	-	-	-	-	-	小貝片含有。
31-	18.598	31.50	3.90	灰褐	砂	-
32-	-	-	-	-	-	-
33-	21.198	34.00	2.50	暗青 灰褐	シルト質 粘土	全体的にシルト分を含む。 若干の小貝片有機物を含む。
34-	-	-	-	-	-	-
35-	-	-	-	-	-	全体的にシルト分を含み、砂は微砂
36-	23.598	36.40	2.40	暗灰褐	シルト質砂	で有機物、白雲母片を含む。
37-	-	-	-	-	-	-
38-	25.398	38.20	1.80	灰褐	砂	砂は微細砂へ細砂で粒度もほぼ均一。
39-	-	-	-	-	-	-
40-	27.398	49.20	2.00	灰褐	シルト質砂	砂は細砂で全体にシルト分を含む。
41-	28.198	41.00	1.00	灰褐	砂	中砂～粗砂で粒度も均一。
42-	-	-	-	-	-	-

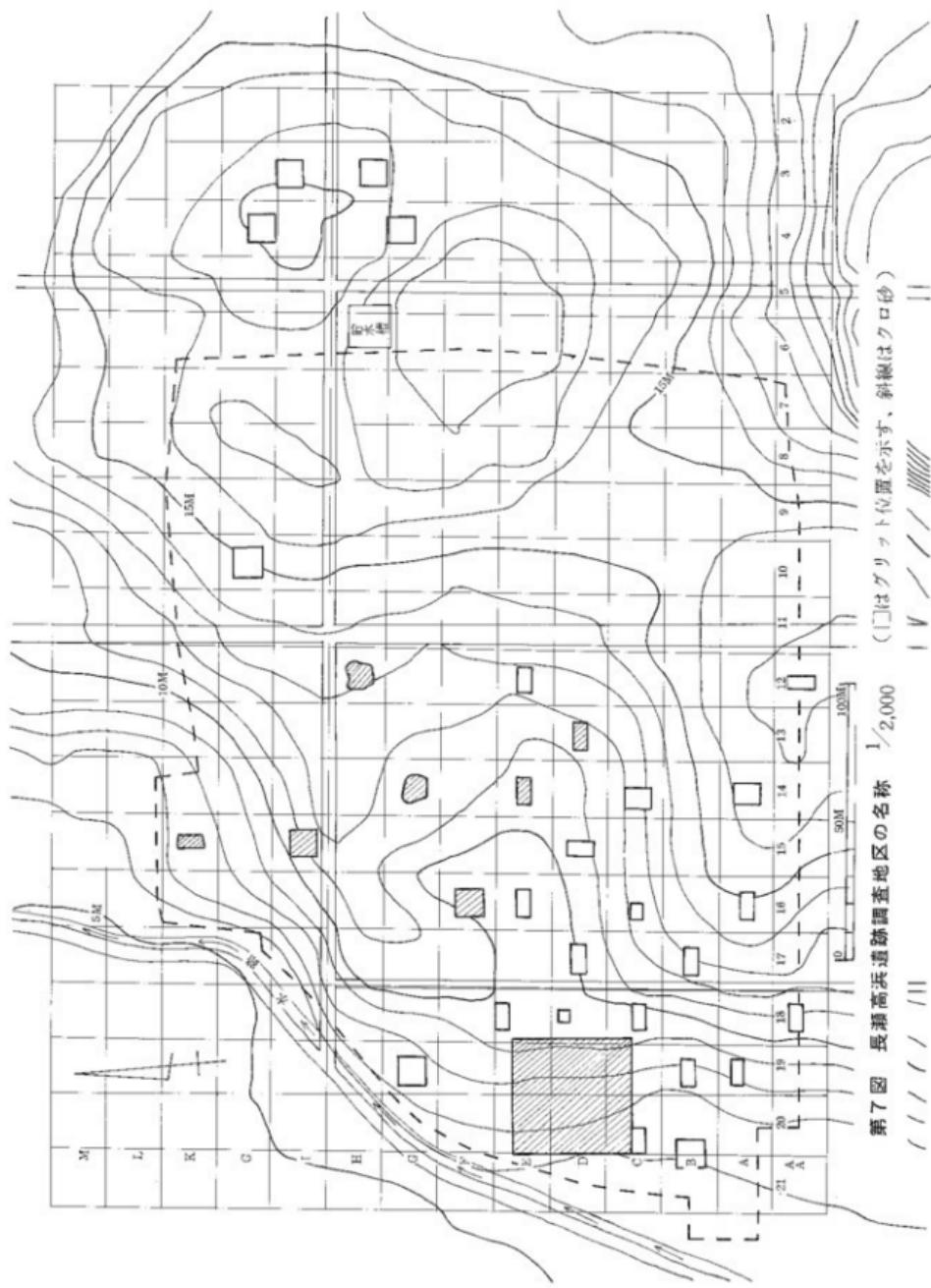
第4図 ポーリング柱状図 調査地点No.3 (13-E)



第5図 遺跡地周辺航空写真



6図 長瀬高浜遺跡調査位置図



第7図 長瀬高浜遺跡調査地区の名称
1/2,000 (□)はグリット位置を示す、斜線はクロ秒)

(3) 砂丘遺跡とクロ砂

県下には、各地に海岸砂丘が発達し、その代表的な存在が鳥取砂丘である。砂丘遺跡については、明治31年（1898年）大野延太郎により石器等の遺物散布地としての報告がなされ、これが、砂丘を遺跡という観点でとらえ研究がなされた滥癡といえるであろう。そして、昭和30年代以降各地の砂丘地は、遺物散布地として、また、工事中発見に伴う遺跡として報告がなされている。

砂丘遺跡の層位的研究に着目されたのは、鳥取大学地理学・自然科学研究室の豊島・赤木尚教授であり、採砂工事による砂丘地断面に、「砂丘下に埋積されている黒褐色腐植まじりの砂層の中から古墳時代とその前後にわたる土器片や鉢器を発見」（「気高町宝木高浜砂丘の研究」鳥大研究報告1964年）等の報告がある。

その後、砂丘地にクロ砂（黒褐色等腐植まじりの砂）層があり、クロ砂層と遺物包含層との関係は宝木高浜砂丘だけの問題ではなく、県下各地の砂丘地で注目されるようになってきた。また、近年、工事中の発見に伴いクロ砂は、遺物包含層のみにとどまらず遺構の存在が認められるようになってきた。昭和46年（1971年）東伯郡泊村宇谷字荒浜の砂丘地で地表下約5mのクロ砂で石棺が半壊して発見され、石棺内には、V字枕をした然生男性骨1体が埋葬されていた（「埋蔵文化財発掘調査概報！泊村荒浜古墳1973」）。また、昭和51年（1976年）岩美郡福部村直波の砂丘地で古墳時代の方形堅穴住居跡と掘立柱建物の発掘調査がなされ、遺構は、新砂丘下のクロ砂・クロボク層下の大山ローム（褐色）層に切り込まれていた（「直波遺跡発掘調査報告」1976年）。両者はクロ砂の地層に差違はあるけれども、砂丘地が古墳時代中・後期に墓地と居住地の双方に利用され、遺跡はいずれもクロ砂と深いかかわりをもっていることが明らかになった。長瀬高浜遺跡の所在する北条砂丘の西部、大栄町東園の東園第2遺跡でも砂採取工事の断面に現在でも幅40～50cmのクロ砂層がはっきりと見られる。そのクロ砂層の中に石棺と考えられる石材片及び弥生後期の器台片も見られた（1977年10月）。

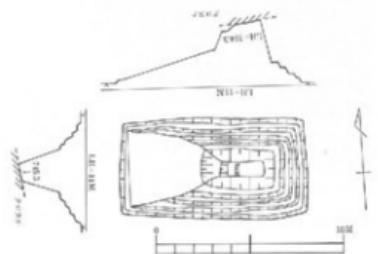
長瀬高浜遺跡の試掘調査の結果クロ砂についての所見が明らかになりつつある。

- 1 クロ砂層は現在の砂丘下全面を被覆しているのではなく調査地の南部では見られない。
- 2 クロ砂層の起伏（海拔3～8m）は、現在の砂丘の起伏（海拔5～18m）に比較して小さい。また北部ではクロ砂層が地表から浅く0.5m内外でクロ砂を検出している。
- 3 クロ砂層には、遺物を多量に包含し、調査地西部では墳墓等墓地の密集地である。

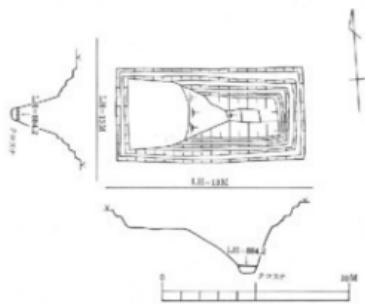
今回の調査は、遺跡の確認調査ではあるが、今まで砂丘遺跡の歩んだ工事中発見による調査ではなく、砂丘地に計画的に試掘調査を実施したことは今後の砂丘遺跡の研究にとって意義深い調査と考えている。

(4) グリッドによる試掘

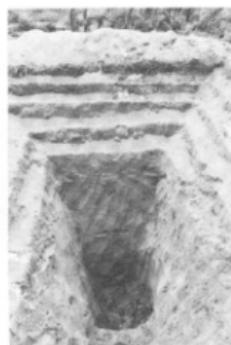
発掘調査は約3万m²の砂丘地のなかの遺構を調べるために、グリッド(升堀り)による発掘方法をとった。その方法は、対象地区内に予め20m方眼の区画を設定し、その区画が全域を溝遍なく網羅するように、23箇所のグリッドを抽出したものである。



第8図 14-Eグリッド平面図断面図



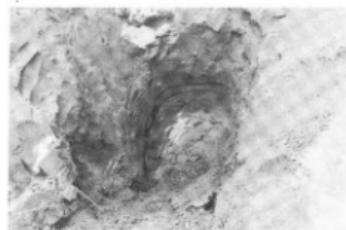
第10図 13-Dグリッド平面図断面図



第9図 14-Eグリッドを西方より望む



第11図 13-Dグリッドを西方より望む



第12図 13-Dグリッドのクロ砂を望む

各々のグリッドはグリッドの表面積を5m×10m或は10m×10mとして、砂丘地における遺物包含層とみられるクロ砂層追求のため、それぞれのグリッドでこの層に至るまで、掘り下げを行なった。この結果、20-D、19-D、20-Eグリッドで、地表から比較的浅い地点でクロ砂を検出した。これらのグリッド上は、表砂にかなりの数の土器片が散在していたところで、当初から遺跡の存在が立証されていたところである。この地



第13図 発掘風景(天神川より望む)



第14図 グリッド断面にあらわれた砂鉄層



第15図 地下水面に至る(重機による試掘)

区は後で拡大して、古墳、火葬墓、石棺群の検出に至った。

一方、人力による掘り下げを行なっていった。その他のグリッドでは、13-D、14-E グリッドを除いては、地表から平均 3m 50cm~4m 50cm までの掘り下げにも拘らずクロ砂の確認ができなかった。13-D、14-E のクロ砂を検出したグリッドにおいても表砂からクロ砂までの灰白色砂層中に、土器片等の遺物がみられないことがほとんどであった。僅かに検出したものは、石片、摩滅した土器片等が断片的で、グリッド内に数点あるいは皆無の出土状況であった。

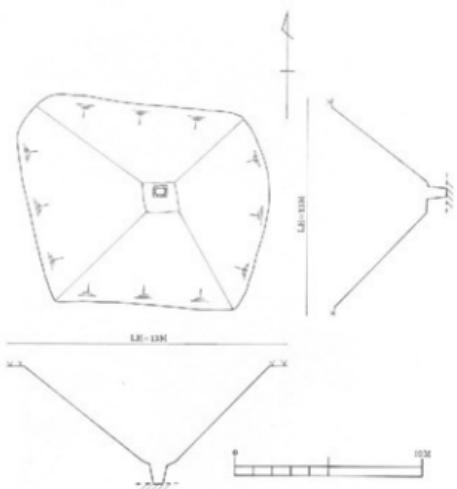
尚、3-H、4-G、3-I、4-Jについても試掘を行なったがクロ砂の検出はできなかった。

地表面より深い地点でクロ砂を確認した 2 つのグリッドについて述べると、まず 14-E グリッドでは、地表面より 3m 20cm(標高 745 m) の地点でクロ砂を検出した。このクロ砂は北より南側方向に傾斜が上っており、クロ砂層が一定でないことが推測された。検土杖でクロ砂の厚さを測ったところ約 50 cm の厚みを持っていた。この層には土師器片数点が含まれていた。

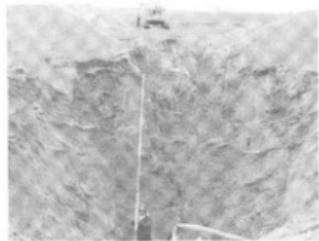
13-D グリッドでは地表面より 5m 05cm(標高 884 m) の地点でクロ砂を検出した。このグリッド内のクロ砂層は非常に薄く(厚いところで 11 cm) 次第に消滅している。(写真参照) このクロ砂層で土師器小片、ヘギ石等を検出した。

両グリッドは現地形でいうと砂層の鞍部に位置しており、また両グリッド間が比較的近いことから、クロ砂が 14-D~13-D 間で連続していることが考えられる。

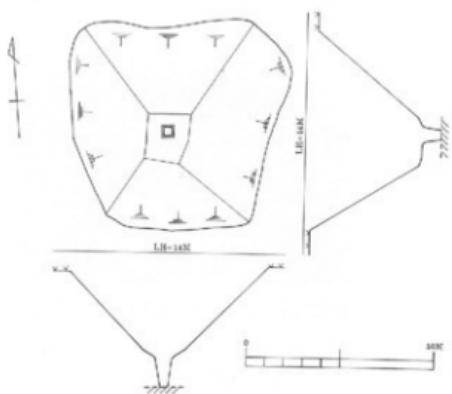
(5) 重機による試掘



第16図 14-Gグリッド平面図断面図



第17図 14-Gグリッドを南方より望む



第19図 12-Hグリッド平面図断面図

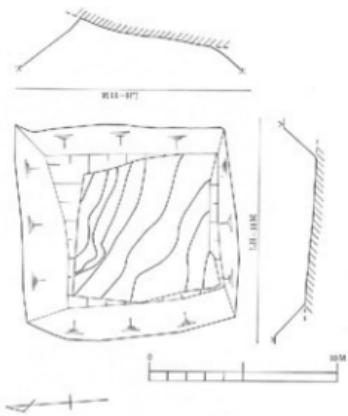


第18図 12-Hグリッドを北方より望む

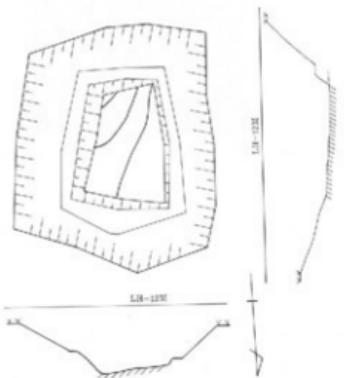
Eラインより北側の地区は、ユンボによる試掘を8箇所試みた。これは、Eラインより南側地区において手掘りを試みた結果、4mぐらいの掘り下げが人力による掘り下げの限界と考えたためで、それ以上の掘り下げを試みるために行なったものである。この試掘方法による結果14-Gグリッドで標高5m60cm、12-Hグリッドで標高6m80cm、16-Fグリッドで標高8m60cm、15-Iグリッドで標高8m60cm、15-Kグリッドで標高

6m80cmの地点でそれぞれクロ砂を検出した。14-G、12-Hのクロ砂は黒灰色を呈し、土師器片等の遺物を包含していた。

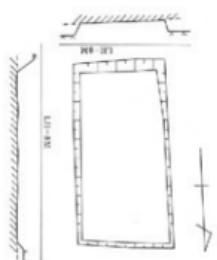
16-Fグリッドのクロ砂は地表から比較的浅い所で検出されたが、このクロ砂は起伏をもっており、北東方向に落ち込んでいる。尚、このグリッド内で遺物として土師器片、埴



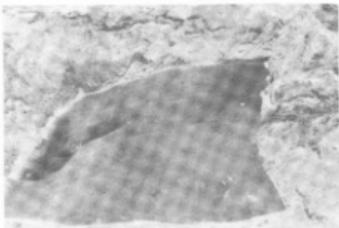
第20図 16-F グリッド平面図断面図



第22図 15-I グリッド平面図断面図



第24図 15-K グリッド平面図断面図



第21図 16-F グリッドを西方より望む

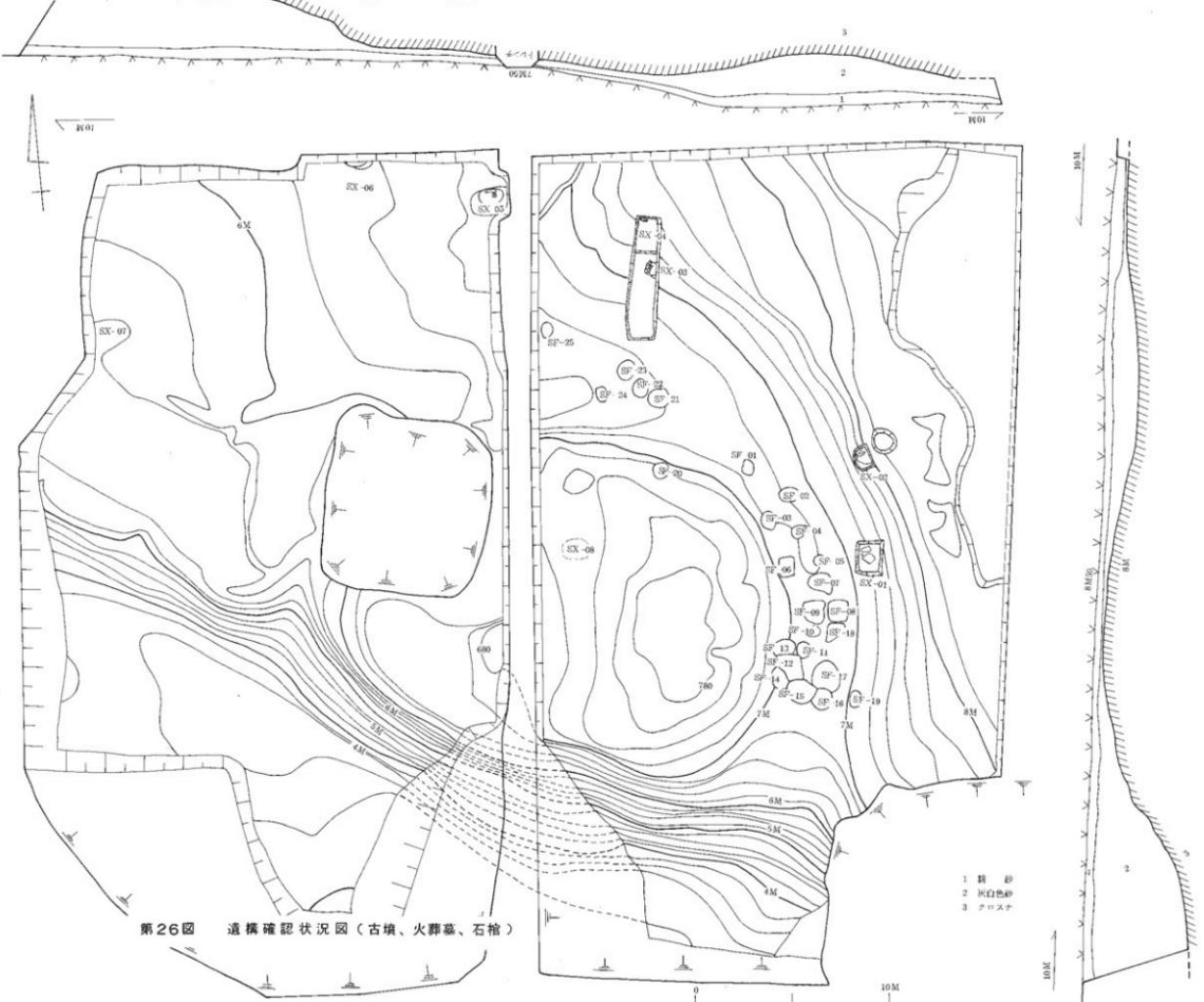


第23図 15-I グリッドを北方より望む



第25図 15-K グリッドを北方より望む

輪片を検出したが全般的に遺物の量はかなり少ない。
15-I のクロ砂は黒灰色を呈し南東方向に落ち込む。
15-K のクロ砂は、耕作のためかなり擾乱されているが、土器片等の遺物をかなり含む。ここで円筒埴輪片 2 点を検出した。



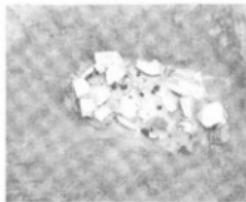
第26図 遺構確認状況図(古墳、火葬墓、石棺)

2 火葬墓

古墳の東・北側の周溝部上層で、現在までに25基の中世のものと考える火葬墓が検出されている。これらは、大きく2つのタイプに分類できる。すなわち、(1)墓壙の中に石組を有するものと(2)墓壙だけのものである。(1)はさらに、Ⓐ板石を石棺状に組み合わせ、底部にも板石をしいた作りのていねいなものと、Ⓑ角礫を雑に組み合せたものの2つに分けることができるが、共に使用された石材の大半は強い火を受けた痕跡が認められ、非常にもろくなっている。火葬墓の分布する一帯は、灰、炭、骨片等が広く散布している。石組みの下でも炭・骨片が検出されることや、石材の火を受けた痕跡等からみても、この地区で火葬が行なわれ、埋葬されたものと考えられる。



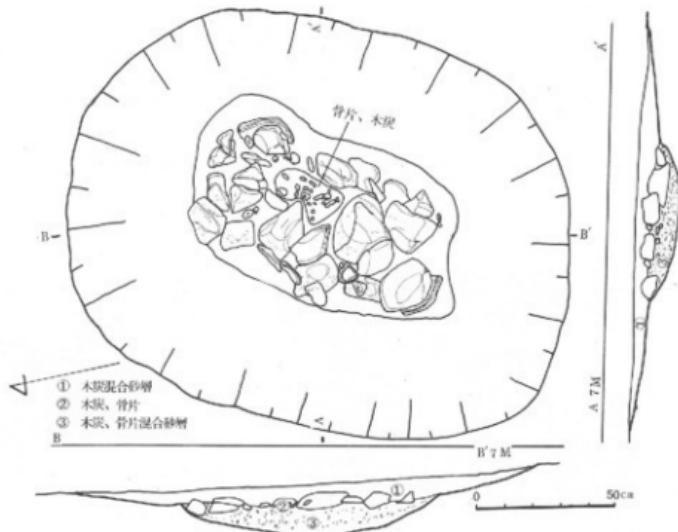
第27図 19-D 火葬墓群



第28図 火葬墓(SF-17)

17号墓
(SF-17)

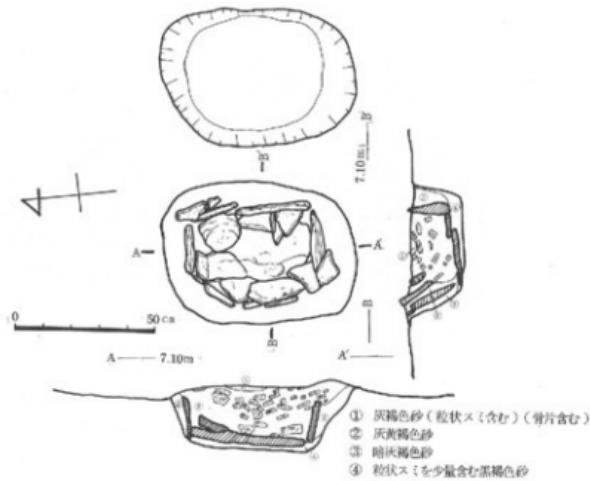
角礫を組み合
わせたタイプに
属し、墓壙は長
軸1m80cm余
り、短軸1m45
cmを計る。石組
み中央で、木炭
と骨片を検出し
た。



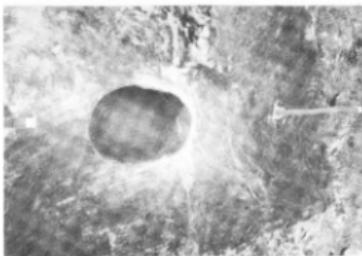
第29図 火葬墓(SF-17)実測図

19号墓 (SF-19)

19号墓は長方形に板石を組み合わせて造られている。底部にも板石を組み合わせて敷いており、内部に面した板石は高温で焼かれたために赤褐色に変色している。この火葬墓の石組みは他のタイプに比較して小型である。内部には直径5cm前後の木炭が極めて多量にあり、骨片は石取み上面に少量乗っていた。石組みの長軸50cm、短軸35cm、深さ20cm前後である。



第30図 火葬墓(SF-19)実測図



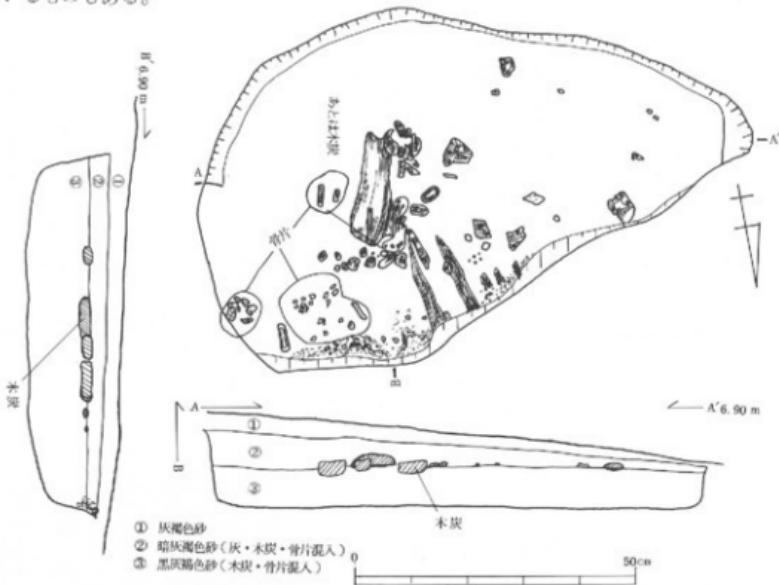
第31図 火葬墓(SF-19)墓壙



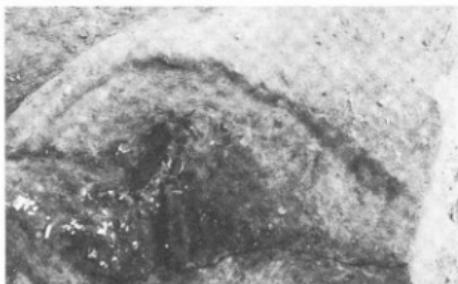
第32図 火葬墓(SF-19)写真

2号墓 (SF-2)

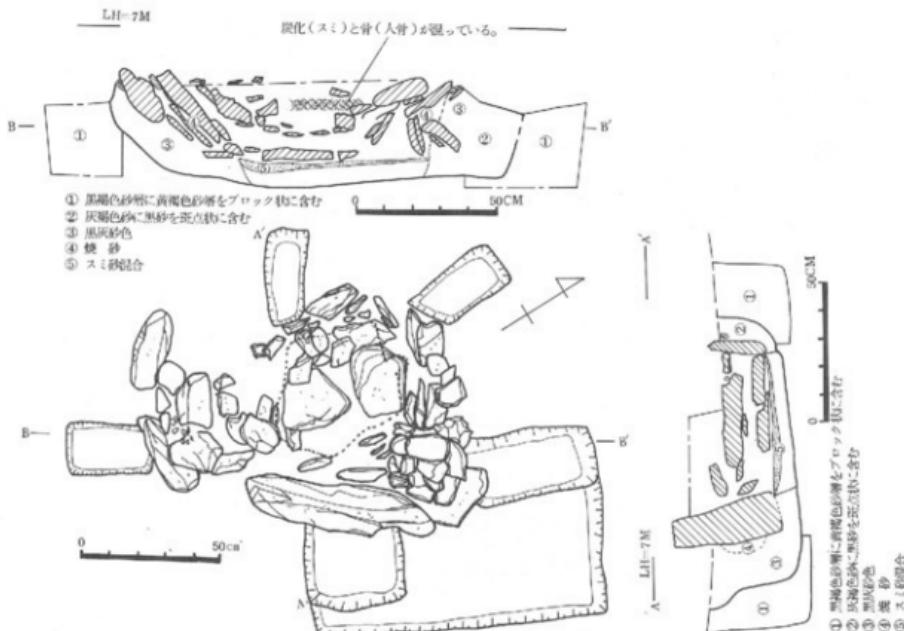
墓壙だけのタイプに属するものである。墓壙は長軸1m90cm、短軸1m40cm、深さ26cmを計る。写真で白く見えるのが骨片で、木炭も大きなものが検出された。同じタイプの火葬墓の上面から古銭（1枚は「開元通寶」）2枚が出土している。明らかに供養銭である。このタイプの火葬墓が最も多く見られ、中には人頭大の河原石が数個、遺構の上面に置かれているものもある。



第33図 火葬墓(SF-2)実測図



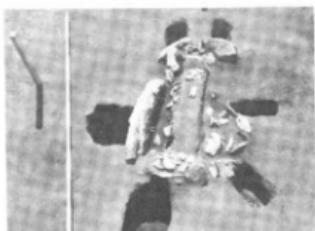
第34図 火葬墓(SF-2)



第35図 火葬墓(SF-18)実測図

18号墓(SF-18)

長径 1m 50cm、短径 1m 05cm、深さ 32cm の墓壙の中に、長軸 70cm、短軸 48cm、深さ 37cm の石棺状の石組みが検出された。この火葬墓は現在検出している火葬墓の中では最も大きなもので、東側の側壁には板石の大きなものを使用しており、内部には骨片と木炭が 5cm 前後の厚さで堆積しているものが検出できた。土師質土器も遺構上面で出土しており、1点ではあるが底部の糸切痕が明瞭に観察できるものがある。一応現時点では中世のある時期の火葬墓と考えている。これはタイプとしては板石を組み合わせた石棺状のもので、底部も板石の大型を 1 枚と小型の板石を数枚使用している。主軸は南北にとっているが、このタイプの火葬墓はすべて主軸を南北にとっており、意図的なものであろうか。



第36図 火葬墓(SF-18)



第37図 火葬墓(SF-18)北から
検出時の状態

3 古 墳(1号墳)について

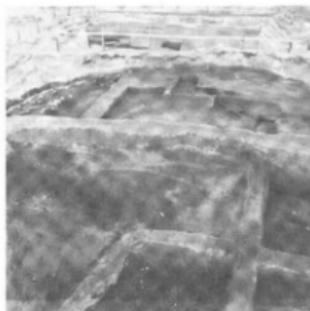
調査対象地区内で古墳として確認されたのは1基である。発掘当初、クロ砂面での住居跡の探索、また、グリッド方式による部分掘りを行なっていたため、古墳として確認されるにはかなりの日数を要した。

クロ砂上面では、人頭大の円礫がクロ砂の斜面にまばらに点在していたが、古墳としてはっきり確認されたのは19-D区画北半分のクロ砂にトレントを入れてからのことである。このトレント内で、クロ砂上面より20cm～30cmのところに敷きつめられた葺石が帶状に検出され、古墳であることが判明したのである。

古墳は、19-D～19-C、20-D～20-C区画内に位置しており、墳丘はクロ砂の起伏で推定される。それによると、古墳の東側、西側、北側に周溝をもつようである。西側は、いったん墳丘が下がった後再びあがり、平坦なクロ砂面を形成する。古墳の南側はクロ砂層が



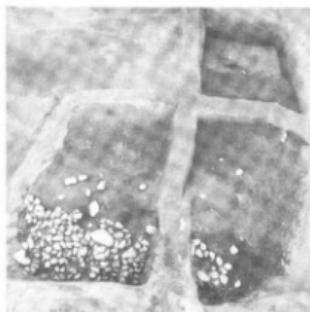
第38図 西より、古墳北側の葺石を望む



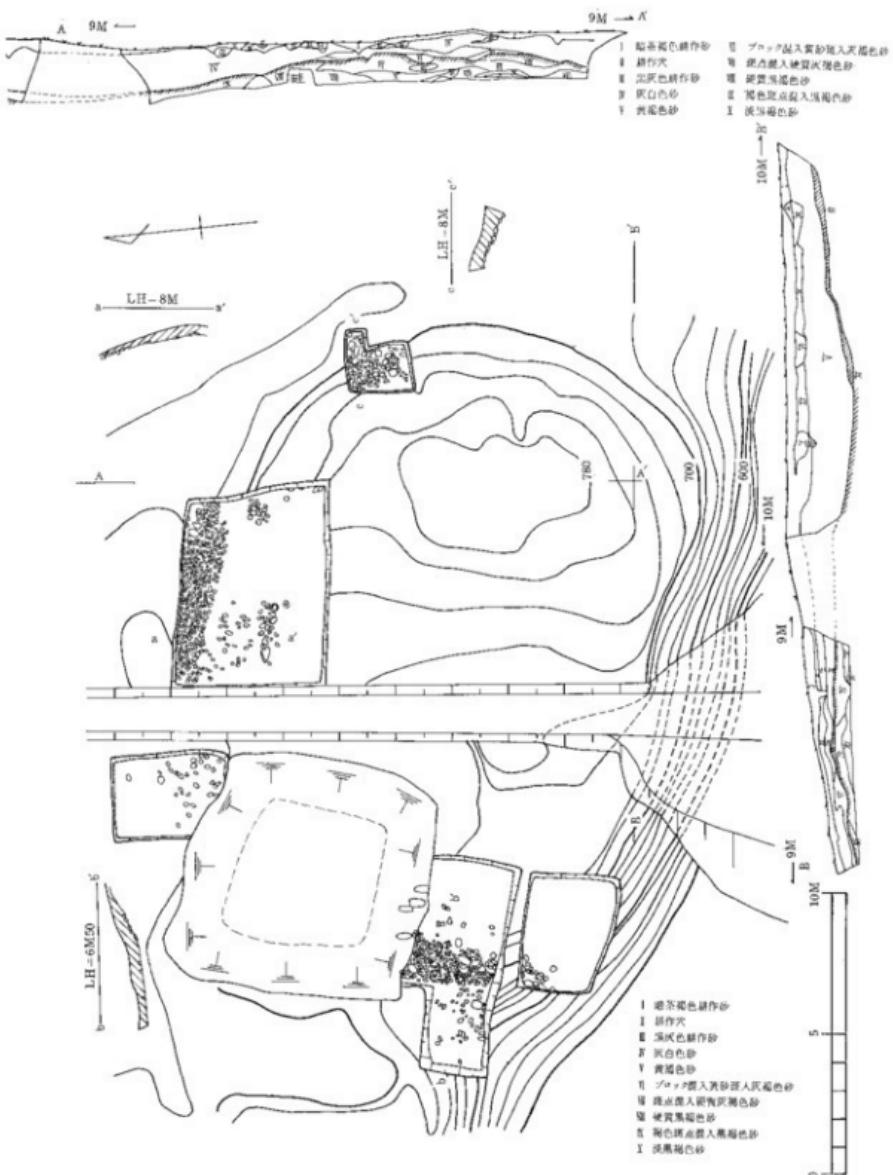
第40図 西方向より、古墳発掘現場を望む



第39図 南西より、古墳西側を望む



第41図 西方向より、古墳西側の葺石を望む



第42図 填丘周辺の実測図

急傾斜で下がっており他の三方と異なることから、こここのクロ砂の地形は、かつての自然地形と考えられる。

墳丘は、東西26m、南北21m、高さ東で2m、西で3mの椿凸型の円墳であり、周溝を含めると、東西約40mに及ぶ大型の円墳である。クロ砂上面の等高線から判断すると、円墳以外の高塚とも考えられなくはないが、西側の一部が近代の開墾により8m50cm×8m30cm（深さ未確認）の井戸型に切りとられていてはっきりしないこと—この井戸型の遺構は壇面に粘土の付着がみられる、相当深く掘り込んでいること等により、近代の砂丘開墾による浜井戸と推定されるものである—また、墳丘の一部の葺石をトレンチにより検出したのみで全面の葺石、築成当時の墳丘面を未確認のため古墳の外郭がわからっていないことなどから、やはり円墳と考えた方がよいであろう。

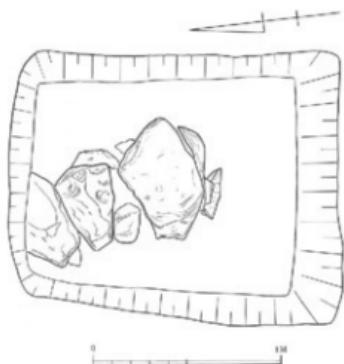
東、西、北側の3地区にトレンチを入れたところによると、この円墳に、径10cmから20cm大の円礫でなかに若干のヘギ石を含む葺石が、約170cmの幅で帯状にぎっしりつまり円墳の裾部を形成している。西側トレンチの葺石は、一旦60cm程急に下がった後水平に続き周溝をなしている。その他の方々でもクロ砂の地形から判断して周溝の存在が考えられ、結局周溝がこの古墳の裾部をなしているものと考えられる。

尚、古墳中央部で検土杖により石棺の存在を確認しており（SX-08）、この石棺がこの円墳の埋葬主体部であると思われる。

墳丘内の遺物については、クロ砂上面から墳丘内部にかけて夥しいほどの上器片が出上している。上器には壺、甕、高杯等の器種をもつ土師器が圧倒的に多いが、なかには寬指沈線をもつ弥生式土器、石斧も數点混入していた。須恵器は葺石周辺で断片的に検出された。墳丘斜面、並びに墳丘周辺で円筒埴輪片を数点検出した。

この墳丘調査は、クロ砂の墳丘測量、一部の地区での掘り下げを行なったのみで、墳丘の築成時期を明確に言い表わすことはできないが、現在の段階では、古墳時代中期と推測される。

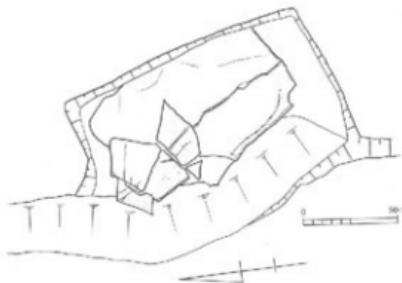
この古墳を取り巻くようにして7基の箱式石棺が単独に確認されていることから推し測ると、この古墳の被葬者はこの地域の盟主的存在であり、この地区がこの一族の一大墳墓地であると考えられる。



第43図 SX-01箱式石棺平面図



第44図
出土位置図



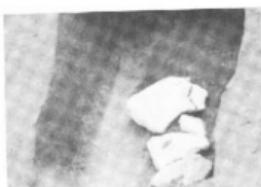
第47図 SX-02箱式石棺平面図



第48図
出土位置図



第49図 SX-02西方より望む



第45図 SX-01南方より望む

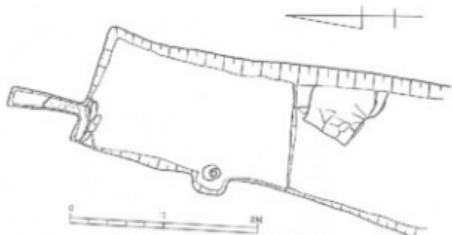


第46図 西方よりSX-01
SX-02を望む

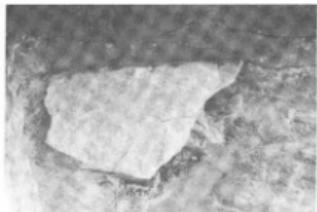
今回の調査対象区内で古墳の周辺に箱式石棺が7基、古墳の埴丘内に1基の計8基が確認された。このうち6基を掲載したが、これらは調査期間中クロ砂掘り下げ段階で偶然発見したもので、クロ砂直上にはっきり掘り方を伴って確認されたものではない。

箱式石棺 SX-01

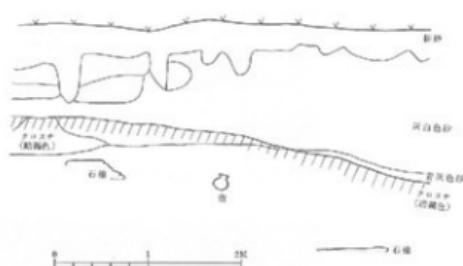
19-D区画東側ライン近くにあり傾斜を持ったクロ砂中にはば水平に位置す。古墳との位置関係は、周溝を挟んで向かい合った形となっている。主軸を北西～南東に持ち、蓋石は数枚の石材の組み合わせからなる。石棺の規模については掘り方、石棺の



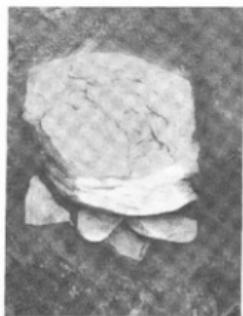
第50図 SX-03、SX-04箱式石棺
蓋石検出状況平面図



第52図 SX-03蓋石の一部



第51図 SX-03、SX-04出土位置図



第53図 SX-04蓋石の一部

規模未確認のためいまのところわからない。

箱式石棺 SX-02

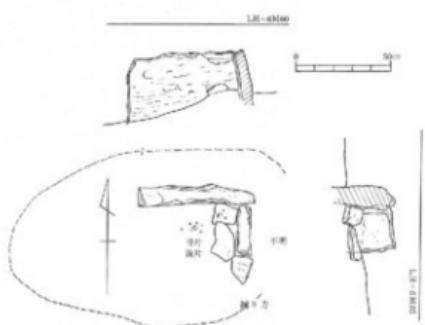
19-D区画東側ライン近くにあり、SX-01から北側に5m程の位置にある。蓋石のみの検出で、掘り方、石棺内部についても未確認である。主軸は北西～南東に持ち、蓋石は1枚だけである。その規模は長軸105cm短軸65cmである。

箱式石棺 SX-03

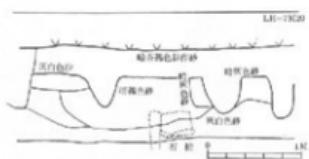
19-E区画南側にあり、古墳の北側、クロ砂上面より約90cm下のところにある。蓋石、側壁の一部を確認したのみで全体についてはわからないが、主軸は北西～南東方向と思われる。

箱式石棺 SX-04

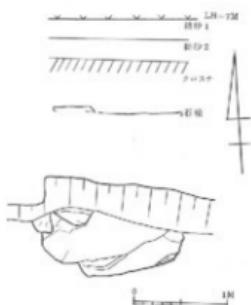
19-E区画中央にあり、SX-03の北側クロ砂上面より45cm下のところにある。蓋石の一部を確認しただけであるが、ほぼ円形で、他の石棺構築法とは異なるようである。この石棺の位置より水平距離1m、SX-03より垂直に約65cm上ったところで完形の土師器（広口壺）を検出した。



第54図 SX-05箱式石棺平面図・断面図



第55図 SX-05出土位置図



第56図 SX-05 V字枕まくらをもつ



第56図 SX-05 V字枕まくらをもつ



第57図 SX-05を西より望む



第58図 SX-06を北より望む

箱式石棺 SX-05

20-E区画東側ライン近くにあり、古墳の北方に位置する。この石棺は、水道管布設工事或は耕作のため蓋石、側壁の半分を欠いていた。このため全体の規模はは握しにくいが、残存していた掘り方から判断して、小型の箱式石棺と考えられる。棺内にはV字枕があり、その周辺に骨片、歯片が検出された。石棺主軸は東西方向である。

箱式石棺 SX-06

20-E区画中央部、古墳の北側に位置しクロ砂上面より約56cm下のところにある。蓋石、側壁の一部を確認したのみであるが、主軸はほぼ東西方向、長軸は150cmの石棺で、SX-02、SX-03に近似した蓋石を持つ。この石棺周辺には、多数の土器片が散在していた。

5 土器群について

土器群 1

19-E グリッドの東側の土器群の中で、高坏の上に小型の壺が乗り倒れた状態で出土した。もう1セット同じ状態で近くから検出しており、時期的にも同じものである。

19-E グリッド東側のクロ砂が薄くなつて切れかかり、白砂に続くあたりで土師器がまとまって出土した。遺物は壺、高坏であるが、壺は小型のものが多く、クロ砂にくい込んでいるものの、この部分のクロ砂はいくらか移動した痕跡が見られる。遺構は現在調査中である。

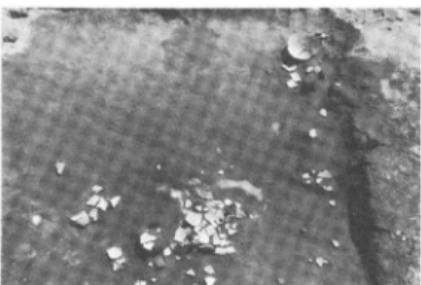
19-D グリッドの北東すみにおいて、クロ褐色砂層を 20 cm 前後掘り下げたところ、復元可能な弥生時代前期の土器を 2 個体検出することが出来た。弥生前期の土器が現在のところこの遺跡では最も古い時期のものである。写真右上に見えるのが壺で、下に見えるのが壺である。この部分は 19-D グリッドにおいては最高レベルで、黒褐色砂層が南北につづいている所であり、弥生前期の遺物が多い。



第60図 19-E 小型壺のセット出土状況



第61図 19-E 土師器群検出状況
(西方から)



第62図 19-D 北東スミ 弥生前期土器群
検出状況 (西方から)

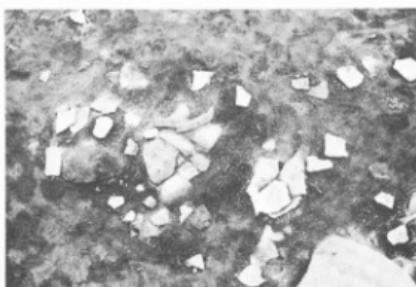
土器群 Ⅱ

20-E グリッドの南東スミにおいて完形に近い甕と壺を検出した。広口壺は底が一部破壊されている。またこの近くより須恵器の蓋と环、小型丸底壺を検出している。



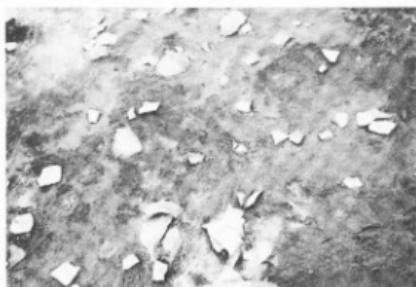
第63図 20-E 南東スミ 壺と甕の出土状況

20-E 北東側においてクロ砂上面からほぼ全面にわたって土器が検出できた。クロ砂を掘り下げて行くにしたがって出土量も多くなり、住居跡の可能性が考えられるが、まだ遺構として確認していない。出土遺物は土師器の壺、甕が多く、高环や弥生前期の甕の口縁部も検出している。



第64図 20-E 北東側 土器群検出状況

右の写真はクロ砂を40cm前後掘り下げて土師器の高环、甕を検出した状態である。このように20-E では多量の土師器が出土している。調査は続行中で、現在は40cmクロ砂を掘り下げたところである。この一帯からも弥生前期の土器が出土している。



第65図 20-E 北側中央 土器群検出状況

III 遺物

出土した遺物は、整理箱に 50 箱以上の量である。現在、調査と併行しながら整理中の段階であり、一応整理の手を加えたものは全体の一割程度である。概観して、弥生時代から中世までの長い時代にわたる遺物がみられるが、ここでは主な出土遺物の概況程度にとどめておく。

遺物は弥生土器・土師器・須恵器・円筒埴輪・土師質土器・石製品・土製品・古銭・鉄製品などで、いずれもクロ砂直上・クロ砂中で出土するが、遺跡が砂丘に立地しているということもあって、層位的な把握は困難な状態である。

1 弥生土器

弥生土器として取り上げられるものは、現段階においては前期から中期までのものである。器種としては甕・壺に限られる。

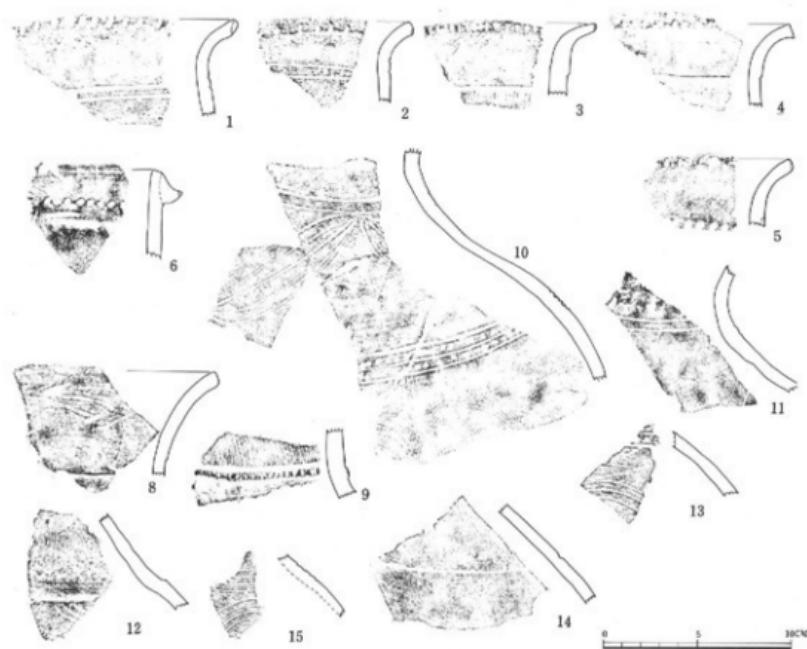
甕【第 66 図-1~6、3~7】【図版 1 の上】

頸部に二条の篦描き沈線を施すもの(1・2)、施さないもの(7)、段を有するもの(3・4)刺突文を施すもの(5)などがある。これらの口縁端には刻み目が施されている。弥生時代前期の中でも古い段階に位置づけられるものであろう。なお、口縁部に突帯を持ち、刻み目を施すもの(6)については、縄文晩期のものと考えられないでもないが、一応、弥生土器の中で取り扱った。

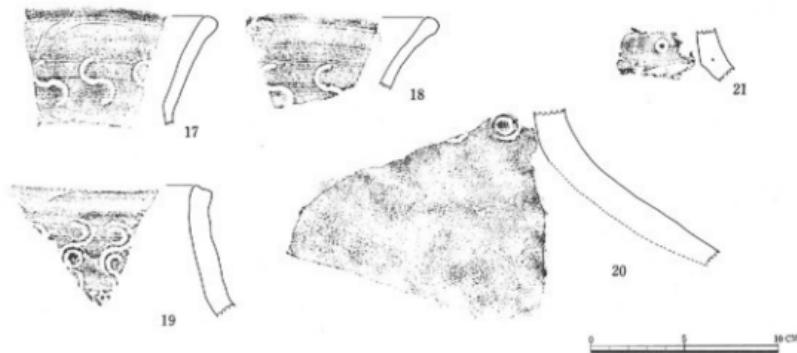
壺【第 66 図-8~15、第 67 図-16】【図版 1 の上】

頸部については、段を有するもの(8)、削り出しの突帯に刻み目を施すもの(9)、二条の篦描き沈線を施すもの(10・11)がある。眞・眞・眞は同一個体のもので、頸部に二条の沈線、頸部から肩部にかけては篦描きによる木ノ葉文が左下りの方向と右下りの方向に施されている。肩部には三条の篦描き沈線、その間に刺突文が施されている。胴部には、篦描きによる重弧文が施されている。なお、三条の沈線間には赤色顔料が認められる。その他眞は肩部に段を有しその下に篦描きによる施文(重弧文か?)を有する。(眞は肩部から胴部にかけて、一条の篦描き沈線を施している。(眞は肩部に四条の篦描き沈線、その下に重弧文を施している。これらはいずれも弥生時代前期の古い段階に位置づけられるものであろう。なお、甕・壺とも施文がすべて篦描きによって施されていることや、壺のほとんどが篦磨きされていることなどが特徴である。

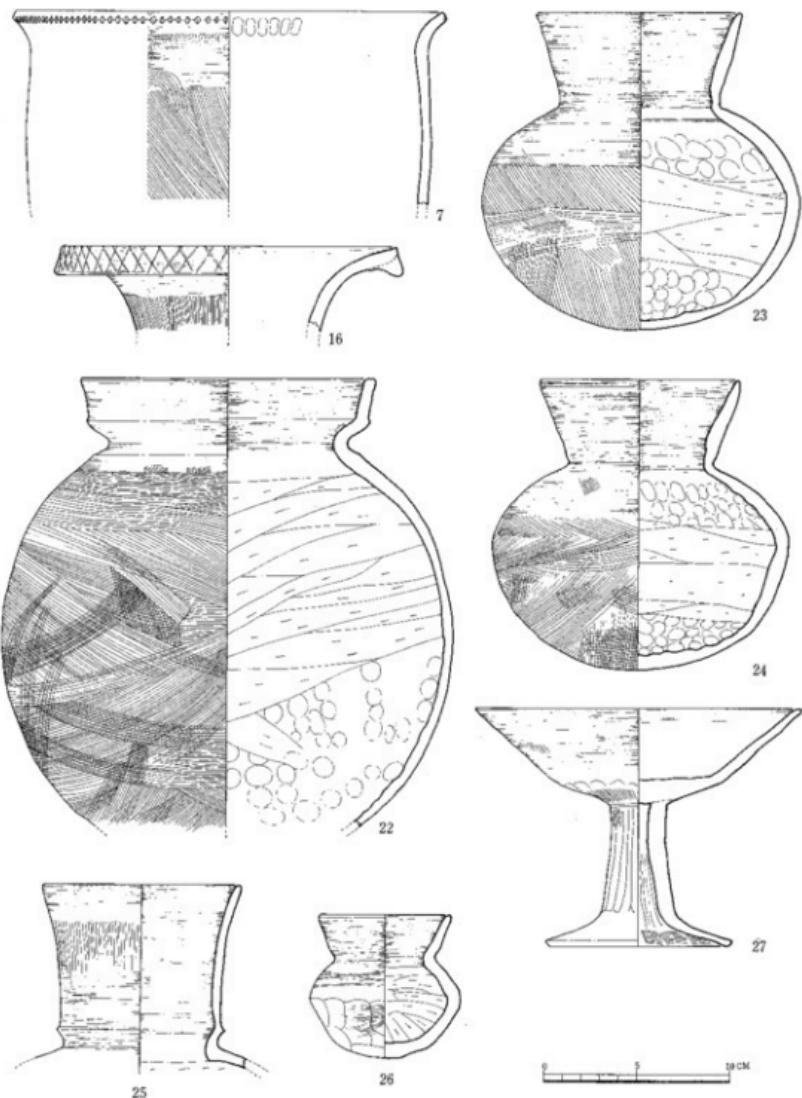
眞は肥厚した口唇部外面に斜格子文を施している。中期の中頃に位置づけられるものであろう。



第66図 弥生土器拓影



第67図 スタンプ施文拓影



第68図 遺物実測図(1)

2 古墳時代の土器

古墳時代前期から後期までの土器が出土しているが、中期のものと考えられる土器が圧倒的に多い。今回、前期に位置づけられるものは図示していない。

土 師 器

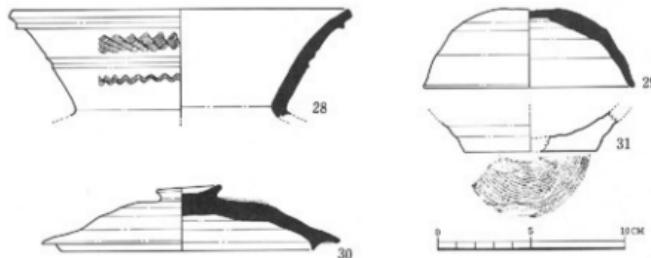
遺物の中で最も多く出土している。器種としては、壺・壺・高坏・小型丸底壺・壺棺・こしきなどである。

壺【第68図-22】【図版2の上】

28はグリッド20-Eの土器群中の出土。頸部から口縁部にかけては複合口縁の伝統を受け継ぐが、稜線の鋭さに欠け、胴部は倒卵型をした器形である。外面はハケ目調整・口縁部内外面、肩部外面にかけてヨコナデが施されている。胴部内面は箒削り、胴部内面から底部にかけては指圧痕がみられる。なお、外面には多量に煤が附着している。五世紀中頃か少し遅るものであろう。

壺【第68図-23・24・25】【図版2の下、3の上】

29は20-E南東隅出土。丸底で、肩のはる器形であり、頸部から口縁端まではほぼ直線的に開く直口壺である。外面はハケ目調整、口縁内外面、肩部外面にかけてはヨコナデが



第69図 遺物実測図(2)

施されている。胴部内面は箒削り、肩部内面、底部内面には指圧痕が観察できる。28と同時期のものかやや遅るものであろう。29は「く」の字形の頸部に外反気味に直立する長い複合口縁を持つ長頸壺で、稜線は鋭さを保っている。

小型丸底壺【第68図-26】【図版3の上】

20-E西側中央で出土。口縁部はほぼ直線的に開き、口径は胴部以上にでない。胴部は偏球状をなす。口縁部内外面、肩部外面はヨコナデが施されている。胴部外面から底部にかけてはハケ目がみられる。

高坏〔第68図-27〕〔図版3の中〕

平坦な坏部底面から縁端にむかって直線的に聞く口縁で、脚部は長く据部で急に「ハ」の字状に聞く。外面には坏部と脚との接合部分に放射状のハケ目が観察できる。脚部外面には面取り、内面にはしぶりめ、放射状のハケ目がみられる。五世紀中頃のものであろう。

スタンプ施文〔第67図-17~21〕〔図版1のド〕

⑩は甕の口縁部と考えられる。外面に「S」字状のスタンプ文が施されている。半截した竹状工具で交互に押圧したものであろう。⑪は壺梢の口縁部と頭部と考えられる。⑫はきれいに二重闇をなすが、⑬の外圈の円はつながっていない、半截した竹状工具を使用したためなのか、それとも押圧する角度によって生じたのか疑問が残る。しかし、内圈の円については、つながっているか所と、そうでないか所がある。このことは、同じ竹状工具を使用しても押圧する箇所と押圧する角度によって、その現われ方が異なることを物語っている。⑭は竹状工具を押圧したものであろう。

須恵器〔第69図-28・29・30〕〔図版3の中〕

⑮は口縁部が朝顔形に外反する甕で、口縁部ちかくに断面三角形の突帯をめぐらす。頭中程にも近接する突出度の低い突帯を二条走らせ、その上下に櫛描き波状文を施している。全体にていねいなつくりである。又、これと同一個体と考えられる肩部破片内面の同心円文はヨコナデによってきれいに消されている。山本清氏による山陰の須恵器編年の第Ⅰ期に比定されると考えてもいいのではないだろうか。一般に古い須恵器を考える場合、「短脚一段透し高坏」を指標にしているが、最近当古墳においても葺石直上でそれに類する有蓋高坏が出土していることを記しておく。詳細は予定されている本報告にゆずる。

⑯は器高は低く、天井部と口縁との境界は不明瞭な蓋である。Ⅳ期に比定されるものである。

⑰は天井部に、輪状のつまみを持つ蓋である。口縁部内部にかえりをもち、そのかえりの先端が口端部以下に突出する。外面には自然釉がみられる。Ⅴ期に比定されるものであろう。

3 中世の土器〔第69図-31〕

長瀬高浜遺跡の下限を示すものとして、⑲の土師質の坏があげられる。全体の器形がわかるほどのものではない。外面整形痕の凹凸が観察され、ヨコナデが顕著である。底部には糸切り痕が観察される。

4 その他の遺物〔図版3の下、4の上・下〕

図版のごとく、石鎌・勾玉・管玉・紡錘車・土錐・土鈴・古錢が出土している。今回の報告にはのせていないが、石斧・砥石・鉄製品なども出土している。詳細は予定されている本報告にゆずる。

土 鈴〔図版3の下〕

表揮である。土による造形品で、手を持ってふるとここちよい鈴の音が聞ける。角や目に相当すると思える部分は、円錐状の粘土が貼り付けられているが、角や目と断定しているものなのか疑問がのこる。なお、外面には黒斑がみられる。

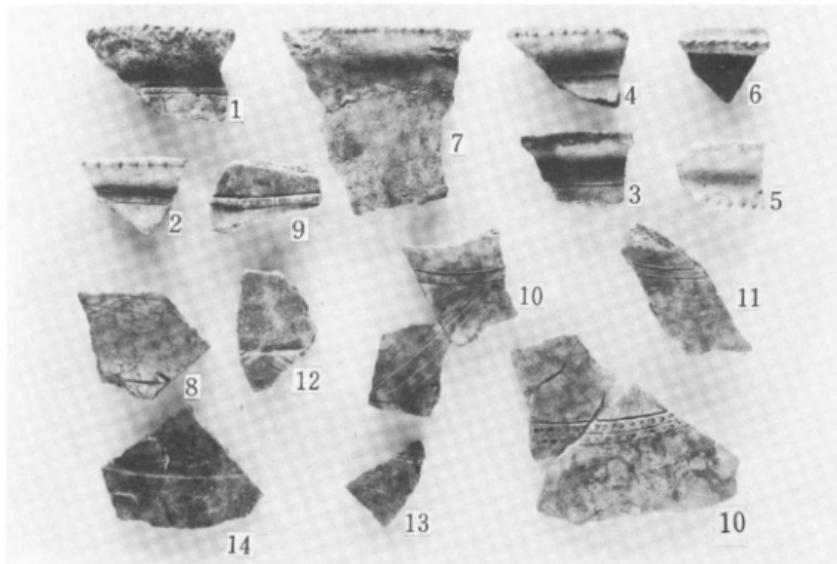
古 錢〔図版4の上〕

開元通寶（A.D 621年）は火葬墓（SF-17）遺構上面から出土している。

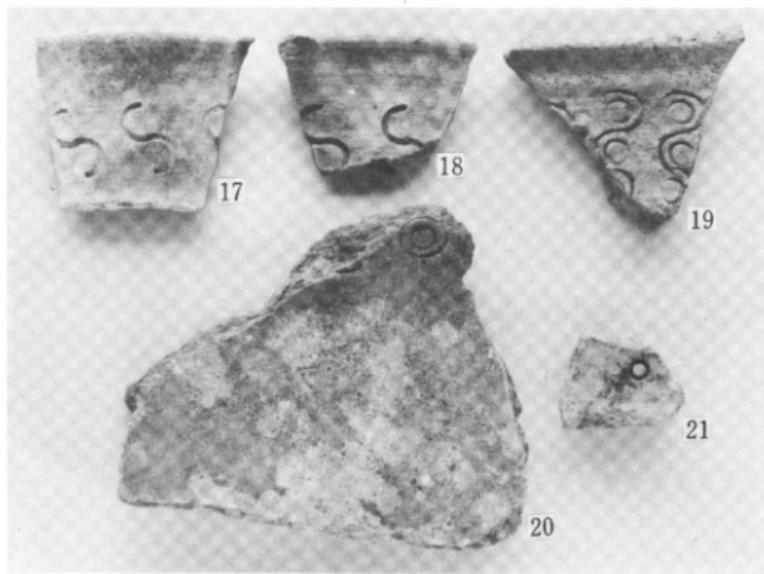
5 遺物のまとめ

長瀬高浜遺跡は弥生時代前期から中世に至る（現段階では、弥生時代後期の土器が出上していないが）長い時代にわたる遺物がみられる。このことは、わたしたちが考えている以上に砂丘と人間とのかかわりの深さを物語るものであろう。特に従来、県内における砂丘遺跡から弥生時代前期と明確に判断できる土器が出土したことはなかったが、当遺跡においては多量に出土している。このことは砂丘史研究の面においても重要なことである。遺構と関連して述べてこられなかったが、グリッド20-Eからは完形品に近いものや、まとまって土器が出土していること、それらの上器自身には年代の開きがありみられないことなどから、遺構が存在していると考えられるが、先に述べたように層位的なは掲げ困難であること、遺跡が中世まで下る複合遺跡であることなどから遺構の検出が安易ではない。そのため現在では、遺構を検出するまでには至っていない。又、祭祀的な遺物と、反面龕に煤が附着することや、石斧・砥石・石鎌・紡錘車など生活の痕跡を考えなければならぬ遺物も出土している。今後、調査が進展するにつれてこういう問題の解明も期待される。

図版 1

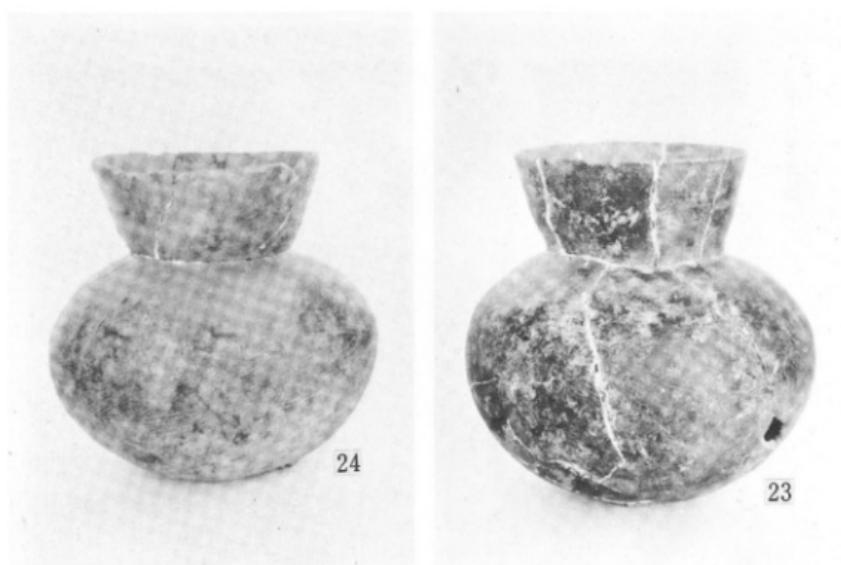


上
下
弥生土器
スタンプ施文



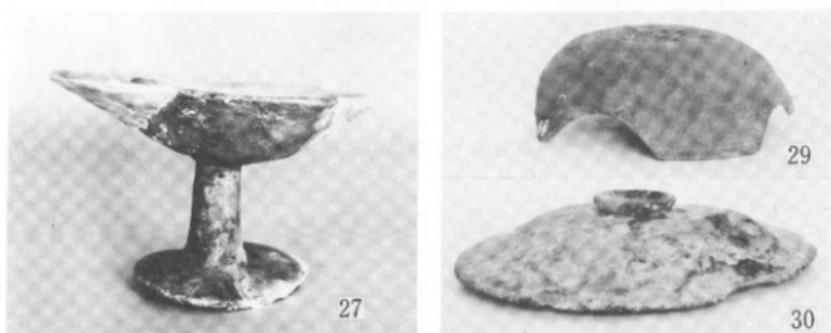


土 師 器 壺



土 師 器 壺

土師器



土師器 高坏

須惠器 蓋



表

土 鈴

裏



石製品・土製品および古銭



土 錘



北条町江北浜北野神社横出土 一九六一年
建設省倉吉工事事務所

土馬（奈良期）



羽合町字和助北（長瀬第二）遺跡出土 一九七六年

倉吉博物館（「博物館だより」）

台つき壺（弥生後期）

IV ま　と　め

工事との調整を図るため、本調査を必要とするかどうかの検討資料を得るのが目的である。試掘調査結果は、大規模な古墳を含む墓地群がクロ砂（黒色等の腐植砂の総称）層内に構築されており、その上を現在の砂丘が数メートルも被覆していることなど次第にわかつてきた。

クロ砂の確認

砂丘遺跡の遺物包含層は、灰白色の現砂丘下のクロ砂層（層厚通常50～60cm）及びクロ砂直上である。従って、クロ砂の分布範囲を確認することにより遺跡の所在範囲をほぼ把握することができ、遺跡調査の第一次指標となり得ることが明らかとなった。

クロ砂層の分布

23か所のグリッドのうち5か所のクロ砂層を確認した。クロ砂の成因が砂丘生成の停滯期の植物繁茂期であるとするならば、クロ砂は長瀬高浜地区全域を被覆していると予測したが、結果はそうでなかった。

南部のBラインより南、約50,000m²の砂丘砂を土木部が発注した請負工事により除去し、さらに、グリッドにより海拔2mの現水位まで試掘を行った。（A-21区）けれども、クロ砂は検出できなかった。これらクロ砂の出ない所は、人為的なものではなく自然の現象により消滅したものと考えたい。

クロ砂と遺構

調査地西端の19-D・20-D区などの約1,200m²を拡幅し、クロ砂層内の遺構の検出に努めたところ、種々の墳墓等を確認した。

中世火葬墓と考えるもの25基、古墳時代箱式石棺墓と考えるもの6基、周溝を含めると径40mにも及ぶ大円墳には、天神川中流の円礎等をびっしり敷きつめている。

遺構としては、現在のところいずれも墓地に関連したものばかりであるが、遺物では、煤の附着した甕が多く、そのほか、石斧、石鎌、砥石、紡錘車など日常生活用品も多彩である。これらの遺物からしても、生産跡、生活跡の遺構も存在しているはずであるが、クロ砂層内の遺構の検出は、極めて困難である。飛砂の中での層厚通常50cm前後のクロ砂の色別をすることが調査の成否の鍵をにぎっている。

今後の調査

工事との関係で、今後の発掘調査が展開されるならば、より広範なクロ砂層の分布状況をは握した上で、墓地群の緻密な調査、クロ砂の性格、さらに、生産・生活遺跡への接近等の総合的な調査が必要となると考える。

長瀬高浜遺跡 I

天神川流域下水道事業に伴う砂丘遺跡の確認調査

発行日 1978(昭53)・3・31

発行者 財団法人鳥取県教育文化財團

〒680 鳥取市東町1丁目326

県営鳥取武道館内

TEL (0857) 26-8038

印 刷 鳥取印刷㈱ 鳥取市叶148



県立博物館航空定点写真 1973 (2万分の1)